

[第3章]

# 再捜索現場からの報告



## 再捜索に至るまで

平成27年4月以降、関係機関は「再捜索を行う」ことを想定して動き出していった。

警察の機動隊は、再捜索時に隊員が高山病にならないように菅平などの高地で何度か高地訓練を行った。その訓練では実働装備を装着し、ガスマスクも付けて、大きな負荷がかかった状態で活動することに体を慣れさせた。新しく入隊してきた隊員に対しては、訓練と並行して前年の御嶽山での活動状況をレクチャーした。

「実働部隊としては、正式決定を待って準備したのでは間に合いません。事務引き継ぎを受けたときから再捜索ありきで準備を進めました」（当時の県警警備部長）

消防は地元の木曽広域消防本部が出動することになるが、一消防本部だけでは人員が不足し、十分な活動ができない恐れがあった。そこで関係機関が知恵を出し合った結果、市町村相互応援協定を活用し、県下の12消防本部からも出動してもらえることになった。

また、県と警察の担当者が6名の行方不明者のご家族のもとを訪れて、お気持ちやご要望をお聞きした。

「大前提となるのはご家族のお気持ちです。まずご家族と話し合ったうえで、どのように再捜索を行っていくかを検



高山域での活動を想定した訓練を行う県警の機動隊員（警）

討していきました」（当時の危機管理監）

当時、危険な場所でどういう手順を踏んで再捜索の本番まで持っていくかについては、警察・消防・自衛隊と幾度となく話し合った。

再捜索の実施を正式に決定したのは、6月4日に開かれた第28回災害対策本部員会議であった。会議終了後に開かれた記者会見で、阿部知事は次のように発言した。

「昨年の噴火から10月16日までの間、警察、消防、自衛



雪解けが進んだ山頂付近。5月8日に県警ヘリで撮影（警）



再捜索の実施を決定した第28回災害対策本部員会議

隊延べ1万5000人の体制で、3期にわたる捜索救助を行ってまいりました。当時の状況としては、できることはすべて実施したというふうに考えております。

しかしながら、今回、いまだ6名の行方不明の方々がいらっしゃるということを受けて、県警を中心にして目撃情報あるいは遺留品の発見場所などの情報を総合的に整理、分析してまいりました。また、私どもとしては継続的に行方不明のご家族の皆様方と連絡を取り、その思いをお伺いしてまいりましたし、先般は地元の本曾町、王滝村を訪問して、町村長、商工関係者の皆様方のお考えをお伺いしてまいりました。

そうしたことを踏まえて、本日の災害対策本部の結論としては、再捜索を実施するというところで進めていきたいというふうに思っています。さまざまな意見が出たわけでありまして、私とすれば行方不明の方々の発見に向けて全力で対応していきたいというふうに思っております」

再捜索にあたっての基本方針として、

- ①捜索する隊員の安全確保を大前提とする
- ②県警と県内消防を中心に捜索を行う
- ③ご家族の思いにできる限り寄り添った対応を行う

の3点を定めた。なかでも最優先事項とされたのが隊員の安全確保である。前年と同様、捜索を中止する基準をしっかりと設け、また捜索活動に入る前には気象庁の担当者か



シェルターの設置訓練を行う木曾広域消防本部の隊員（木消）



再捜索の概要を説明する阿部知事

ら火山や天候の状況についてのレクチャーを受けて入山の可否を決定する「活動調整」を実施することが、本部員会議の席上で求められた。再捜索の流れについては、山の状況や捜索方法を検討するため「調査隊」「先遣隊」「捜索隊」の三つの段階を踏んで実施することとなった。

この時点では、自衛隊の協力を得られるかどうかはまだ決まっていなかった。自衛隊の派遣には三原則（緊急性・公共性・非代替性）の判断基準があるためである。調整には時間がかかったものの、最終的には7月3日、捜索隊員の搬送や物資などの輸送に陸上自衛隊のヘリコプター隊が協力することが正式に決定された。



県警が新たに用意した金属探知機（左）と地表土起こし器（右）（警）



おんたけ2240スキー場の駐車場をヘリポートにするため街灯を撤去

# 第1回合同調査（6月10日）

再捜索の実施に向け、山の状況を把握するための合同調査を6月10日に実施した。

長野県側は県、県警、消防、気象庁、学識経験者、山小屋関係者、木曾町、王滝村の計39名が、岐阜県は県、県警、消防、下呂市の計12名が参加。調査隊を2班に分け、王滝口班22名は5時9分に、黒沢口班29名は5時10分に登山口を出発した。

出発前に気象庁と長野地方気象台が御嶽山の活動状況や気象について情報を提供し、長野県警へ「やまびこ2号」も上空から調査を行い映像を配信。これらの情報を踏まえ、最終的に危機管理監が入山を判断した。

調査の実施にあたっては、警察、消防、県が積雪や火山灰、登山道、山小屋など全般的な状況を、気象庁や学識経験者は火山活動や火山ガスの状況、噴石の飛散状況などを、山小屋関係者は登山道や施設の破損状況を、できる限り調査することが事前に申し合わされていた。

また、安全を確保するため、前年と同様に火山ガス濃度の活動許容基準を設定。硫化水素は10ppm、二酸化硫黄は2ppmとし、この濃度に達した場合はただちに安全な場所へ退避することが決められた。

2隊は山小屋の損傷度などをチェックしながら山頂へ向かい、9時30分に御嶽剣ヶ峰山荘で合流した（黒沢口班は覚明堂で二手に分かれ、岐阜県の一部調査員は五ノ池方面へ向かった）。この時期はまだ山に残雪があり、山頂に近づくほど雪は増えた。積雪は目測で最大1メートルほど、一ノ

池には大きな雪渓があり、足首まで10センチほど埋まる状態だった。登山道の雪もシャーベット状になっていた。

御嶽山の噴火警戒レベルは依然として3のままで、調査に参加したひとは「火口付近から湧き上がる噴気とジェット機のような轟音がすごく、命の危険を感じました」と述べている。

調査は12時30分に終了。黒沢口班は14時32分に、王滝口班は14時50分に全員無事下山した。

火山ガスの濃度は硫化水素が最大3ppm。防毒マスクは不要で活動に支障はなかった。

調査の結果、降灰は黒沢口登山道で約5センチ、お鉢めぐり周辺で40～50センチ、二ノ池方面で30～70センチほどであった。場所によっては泥のような状態となっており、乾いている場所でも棒が刺さる程度の柔らかさだった。全体的にはだいたい乾いて締まった状態で、前年よりも歩きやすくなっていた。

御嶽剣ヶ峰山荘と御嶽頂上山荘は雪が大量に吹き込んでいたため内部に入ることができなかったが、屋根には穴が開き、窓も割れて非常に荒れている状態だった。王滝頂上山荘も奥の倉庫に30～40センチの穴が空いていて、火山灰が小屋内に吹き込んでいた。

長野県は調査終了後に木曾合同庁舎で記者会見を開き、「調査結果を整理、分析、情報共有して再捜索に役立てたい」「再捜索は行方不明者のご家族の思いにしっかり寄り添って進める」とコメントした。



雪解け水で带状に削り流された火山灰（木消）



雪に埋め尽くされた御嶽頂上山荘



お鉢めぐり南側の火口から噴煙が立ちのぼる（木消）

## 第2回合同調査（6月30日）

第1回目の調査結果を踏まえ、御嶽山の山頂付近の残雪や火山灰の状況などについて補完的に調査するため、6月30日に第2回目の合同調査を実施。

今回は長野県単独で、県、県警、山小屋関係者、木曾町、王滝村の計22名が参加した。

気象庁火山課と長野地方気象台から「火山は静穏な状態が続いている」「雨・雷の心配はほとんどなし」との情報提供を受けたうえで、4時40分に危機管理監が入山を決定。5時、王滝口登山道の田の原から徒歩で出発した。調査員は全員がヘルメット、ゴーグル、ガスマスクを装着し、各機関ごとにガス検知器を携行した。

6時11分に八合目避難小屋を通過し、7時33分に王滝頂上山荘に到着。前回、九合目付近で見られた残雪はすでになくなって、登山にまったく支障はなかった。

8時、山頂に向けて出発し、9時35分に御嶽剣ヶ峰山荘に到着。その後は御嶽神社奥社から一ノ池、二ノ池に向けて調査を行い、トラバース経由で再び王滝頂上山荘に戻り、13時25分に下山開始。15時20分には全員が無事に下山した。

今回の調査は、行方不明者の発見の可能性が高い八丁ダルミ付近と一ノ池付近の火山灰および残雪の状況確認に重点が置かれた。その八丁ダルミの残雪はおおよそ3メートル。東側斜面の雪の上に堆積していた火山灰は、雨などによって流されたと思われる、10～20センチほどの火山灰が残っているところも見られたものの、広い範囲で雪面が露



お鉢めぐりを調査。左側が一ノ池

出していた。

また、一ノ池周辺では、北西の内側斜面に120メートル×100メートルほどの範囲で、約40センチの雪が残っていた。一ノ池の北側半分はまだ湿っていたが、南側半分は乾いた状態だった。火口に近い行者岩周辺の火山灰の堆積は、前回調査とほぼ同じ60～70センチ。一ノ池北側の三十六童子の塔周辺の火山灰は約10センチであった。全体的に火山灰は乾燥して締まっており、歩行は容易だったが、火山ガスについては、硫化水素は最大3ppmを検知したが、二酸化硫黄は検知しなかった。

王滝頂上山荘と御嶽剣ヶ峰山荘は内部に吹き込んでいた雪が少なくなっていて、一時的な避難施設として使用が可能であることが確認された。



まごころの塔付近。火山灰の下に雪が2メートル



金属探知機をテストする県警の隊員



八丁ダルミの東側斜面。雪の上の火山灰が流され、雪面が出ているところもある

# 先遣隊派遣（7月12日）

2回にわたる合同調査の結果を踏まえ、本格的な再捜索に先立って7月12日に実施されたのが先遣隊の派遣である。その目的は、捜索部隊の編成や捜索方法、必要な装備品、安全対策などを検討するため、実際に活動する隊員が捜索範囲の状況確認をすることにあつた。

早朝に気象庁火山課と長野地方気象台が情報を提供。火山活動は特に変化の兆候がなく、昼過ぎまでは晴れるとのことだったので、危機管理監が4時35分に実施を決定。4時56分、長野県6名、県警27名、県内消防11名で構成された総勢44名が王滝口登山道の田の原を出発した。

7時21分に王滝頂上山荘に到着し、7時45分から活動を開始。八丁ダルミから剣ヶ峰、一ノ池まで足を延ばし、各エリアの火山灰の状態や融雪の状況を確認。さらに、再

捜索で重点的に調べる箇所や危険箇所、長さ1メートルあまりの棒を目印として立てた。また、シェルターの設置場所の候補地をチェックし、再捜索の際に新たに導入を予定している金属探知機のテストなども行った（岐阜県側の17名は前日に入山し、5時30分に五の池小屋を出発。一ノ池で長野県隊と合流し、打ち合わせをした）。

12時25分に活動を終了して下山開始。14時7分、全員無事に田の原へ下山した。

この先遣隊の派遣では、前回の調査では発見できなかった遺留品が数点見つかった。火山灰が雨で洗い流されたことによって露出したものと思われ、いずれも被災者の所有物と推測された。

火山灰の厚みは、最も深い一ノ池周辺で約70センチ、八丁ダルミで約40センチ、剣ヶ峰山頂付近で10～30センチほどであった。また、八丁ダルミから東側斜面にかけての残雪は1メートル強で、前回調査のときよりも2メートルほど少なくなっていた。

火山ガスは風向きにもよるが、捜索活動中止基準値を下回っており、登山道も通行に支障はなく、山小屋も避難施設として使用可能であることが確認された。

再捜索の計画は、これらの情報を参考にしながら綿密に練られ、具体的な捜索場所や必要人員、使用する資機材などが決められていった。さらに、隊員の安全を確保するためにシェルターを設置することや、自衛隊のヘリコプターが後方支援にあたることも正式に決定した。



王滝口から44名が入山



山頂に到着。テープをつけた目印の棒を担ぎ上げた（松浦）



一ノ池で火山灰の状況をチェック



現地指揮本部設営の準備も行った

## シェルター設置 (7月25日)



シェルター資材の搬入風景



資材をヘリから降ろして設置場所に運ぶ(木消)



訓練の成果もあって組み立て作業は順調に進んだ

御嶽山の再噴火に備え、隊員が緊急避難するためのシェルターの設置は、再捜索が決まったときから検討されてきた。先の先遣隊の調査でその設置場所も絞られ、最終的に一ノ池の西側に3基のシェルターを置くことになった(岐阜県は一ノ池の北側に1基)。災害対策本部としては八丁ダルミに設置したかったのだが、平坦な場所にしか置けないとのことで、一ノ池に決まった。

シェルターは厚さ2.7ミリの鋼板製で、間口2メートル、高さ1.8メートル、長さ4メートルのカマボコ型。1基あたり概ね50名(空身)収容でき、直径10センチの噴石が時速300キロで激突しても壊れない強度を備えている。ただし、御嶽山は長野・岐阜の両県で自然公園に指定されているため、再捜索終了後に撤去できる仮設であるこ

とが前提であった。

設置には、組み立てたものを自衛隊のヘリコプターで吊って搬送するという案もあったが、風に煽られる危険があるため、現地で組み立てることになった。その作業にかかる時間と人員を検討し、現地での滞在時間をできるだけ短くするために、事前に何度か組み立て訓練を行った。

設置作業は悪天候のため2日順延となり、7月25日に実施した。作業には長野・岐阜の両県警と木曾広域消防本部の計46名を動員。自衛隊ヘリ2機が山麓のおんたけ2240スキー場と一ノ池を2往復して人員と資機材を搬送し、7時38分から組み立てを開始した。作業はスムーズに進行し、およそ1時間半後の9時15分にすべてのシェルターの設置が完了、10時52分には全員が下山した。



接地部を土嚢で補強(木消)



完成したシェルター

# 再捜索活動（7月29日～8月6日）

7月21日に長野県庁で開かれた第29回御嶽山噴火災害対策本部会議において再捜索の実施を決定し、以下の方針を確認・決定した。

- ・基本方針は、「捜索する隊員の安全確保を大前提とする」「県警と県内消防を中心に捜索を行う」「ご家族の思いにできる限り寄り添った対応を行う」の3点とする。
- ・捜索開始は7月29日を予定。ただし火山活動や天候等によっては開始時期が遅れる可能性がある。
- ・県警と県内消防は総力を挙げて捜索にあたるように捜索隊を編成する。捜索隊の総計は、後方支援部隊を含めて約600名。
- ・県警が収集した行方不明者6名の各種情報を総合して決定した重点捜索エリア（八丁ダルミ、剣ヶ峰、一ノ池・二ノ池の各周辺）を徹底して捜索する。
- ・重点捜索エリア以外は目視等によって捜索。捜索が困難なエリア、急峻な崖や雪渓等については、ヘリコプターとマルチコプター（ドローン）での撮影と分析を行う。捜索中に行方不明者の発見につながるような新たな遺留品の発見があった場合には、そのエリアを中心に適切な方法により捜索を実施する。
- ・捜索活動の実施は、入山前に気象庁より火山情報を、長野地方気象台より気象情報を提供してもらい、ヘリコプターからの映像により捜索エリアの状況を確認し、現地指揮本部で判断・決定する。捜索活動の中止については、降雨、火山ガス、雷などの状況により判断する。



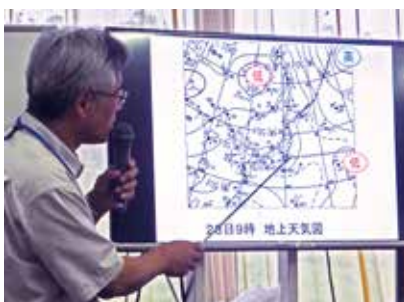
再捜索初日の未明に現地で開かれた活動調整会議

こうした方針のもと、7月29日、再捜索が開始された。期日を決定するにあたって梅雨明けの判断が難しかったが、関東甲信越地方は例年より2日早い7月19日に梅雨明けしていた。現地の指揮本部はおんたけ2240スキー場内のロッジ三笠に設けられ、そこに県と警察、消防、自衛隊の3隊が入った。

## ●再捜索開始

初日の捜索は、天候不良のため入山が遅れるとともに、午後からは雷のリスクも高まり、予定よりも短い時間で切り上げざるを得なかった。

捜索隊が一ノ池まで上がってみると、4日前に設置したシェルター3基のうち、銀メッキ加工を施していない1基



気象庁の職員が常駐して最新の情報を提供



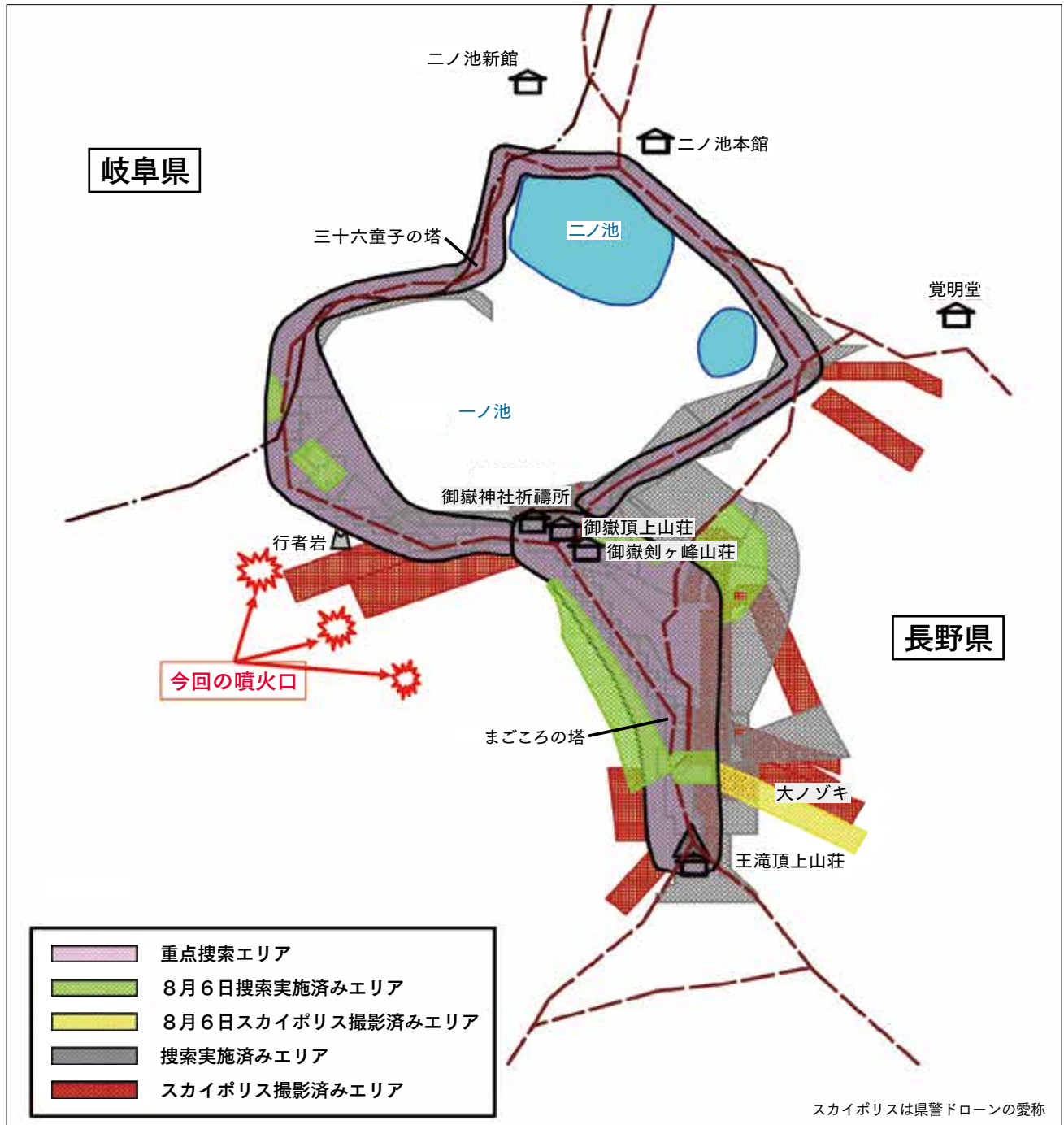
民間施設で初めてテレビ会議システムを導入



おんたけ2240スキー場のロッジ三笠に置かれた現地指揮本部。各機関の指揮所を隣接して配置



御嶽山噴火災害・再捜索実施状況イメージ図（8月6日活動終了時）



ヘリコプターについて自衛隊員よりレクチャーを受ける（長消）



自衛隊ヘリに乗り込む捜索隊員（木消）



一ノ池に到着した隊員が搜索の準備を整える（警）



剣ヶ峰東側の稜線を搜索する消防隊員（長消）



山頂の山小屋付近は繰り返し確認（警）



岩の隙間の火山灰を丹念に掻き出す（長消）

だけが早くも赤茶けた色に錆びついていた。基準値こそ超えてはいないものの、山頂部一带にはいまだに火山ガスが立ち込めているのが一目瞭然だった。

翌30日は天候悪化が見込まれるため搜索は中止に。31日は早朝に火山性微動が発生したため、安全確認を行ってからの入山となったが、8月1日以降は、朝5時に登山口の田の原に一度集合し、おんたけ2240スキー場まで移動して自衛隊ヘリで入山した。スキー場よりも標高の高い田の原に集合したのは、ヘリコプターが飛べなかった場合、迅速に徒歩での入山に切り替えるためである。

山頂部の重点搜索エリアでは、隊員が横一列になって搜

索棒を火山灰のなかに突き刺していく、面的・集中的な搜索を行った。搜索棒も、前年は園芸用の緑色の棒を用いたが、再搜索のときには火山灰が固まっていたので、鉄製のピンポール（工事現場の計測用ポール）を使用した。しかし、堆積した火山灰の表層は平坦ではなく、溝状の雨裂（降雨によって地表面が削られた谷状地形のこと）ができていて、ポールが均等に刺さらないこともあった。特に石室山荘より上部の雨裂がひどく、搜索は厳しさを増した。

絶壁や急斜面の搜索は、警察の山岳救助隊員がロープで下降しながら行った。窟地や雪渓など立ち入りが困難な箇所はマルチコプター（ドローン）を使って撮影し、特異な



八丁ダルミ東側斜面。雪渓はスノーブリッジになっている（警）



お鉢めぐりも重点的に捜索（松消）



山岳救助隊員が急峻な岩場を懸垂下降しながら金属探知機を操る（警）



一ノ池西側の斜面。固まった火山灰に捜索棒を刺して地中を探る（警）



大きい岩の下も見落としのないように捜索（警）



削岩機を使って岩を割り砕く（長消）



重点捜索エリアのひとつ、剣ヶ峰北側の岩場（長消）

ものが写っていた場合は科学捜査研究所に持ち込んで専門家に解析してもらった（当時、ドローンは今ほど一般的でなかったが、県警では交通図面作成用にすでに保有していた）。

また、前年の捜索の教訓を活かし、より高性能な金属探知機や、大学の研究センターが開発した地中探査用レーダーも投入された。ガス検知器も圧倒的に不足していたので、県警が新たに30台購入。消防へは県が支給したほか、総務省消防庁が無償貸与した。地中探査用レーダーは非常に操作が難しいため、大学の研究者に山頂部へ上がってもらった。

そのほか、県警では雨具やザックなどを新調。消防もへ

ルメットやストック、登山用のウェアなどを購入した。

「前の年は支給された合羽を着て捜索していましたが、それが登山用のレインウェアに変わりました。防寒具やザック、スパッツなども整備されたので、格段に活動しやすくなりました」（当時の管区機動隊中隊長）

火山ガスの危険回避には万全を期し、気象庁の担当者から逐次火山活動の情報提供を受けた。また、山岳医療を専門にしている医師に同行を依頼し、御嶽剣ヶ峰山荘で待機してもらった。これは、万一のアクシデントに備えるための措置であった。高山病を予防するため、県は携帯酸素ボンベも用意した。



噴石に備えて警察の防護楯を用意（長消）



火山ガスの濃度が上がるとマスクを着用（長消）



一ノ池の底部。後方にシェルターが見える（警）



ドローンを操作する県警の隊員（警）



金属探知機を使って一ノ池北側斜面を捜索（警）



大学の協力で地中探査レーダーも使用（警）



7月31日、要救助者を発見（松消）



要救助者を王滝口へ搬送（松消）



自衛隊ヘリは霧のため一ノ池に着陸できず、王滝口八合目で長野県の消防防災ヘリが収容した（松消）

### ● 捜索活動の状況

捜索隊を苦しめたのは、夏山特有の天候だった。標高3000メートル級の夏の高山は、大気が不安定になりやすく、午後になると連日のように雷が発生する。

現地の指揮本部に入っていた長野・岐阜地方気象台の担当者は、データを細かくチェックして雷予報を出していたが、二次災害を防ぐため、発雷の可能性があるときは退避時間を考慮して捜索を早めに切り上げなければならなかった。雲がかかるとヘリコプターが着陸できなくなるので、徒歩で下山する場合の時間を考える必要もあった。8月1日から6日までの捜索終了時刻は、1日こそ12時25分だったが、そのほかの日はすべて午前中で切り上げている。

「たとえば発雷予報が12時ごろだった場合、山頂から徒歩で下山すれば2時間程度かかることを考えると、10時には下山を開始しなければなりません。そういう計算をしながら捜索をしていました。つらかったのは、下山してきたときに、報道陣から『まだこんなに明るいし、天気もいいのにどうして下山したのか』と問われたことです。のちには気象台の方に事情を説明していただくようになりました」（木曾広域消防本部の現場対応者）

「いちばん難しかったのは、日々の撤収の判断です。捜索隊員の安全確保は大前提ですが、一方で、少しでも長く捜索してほしいというご家族のお気持ちが痛いほどわかりましたから」（当時の危機管理監）

そのような制約があるなかでも、「なんととしてでも6名を見つけ出す」という強い気持ちを全員が抱きながら、隊員は終了時刻のギリギリまで懸命に捜索を続けた。

日々の捜索終了後は、県、警察、消防の担当者がその日の活動内容を報告し合い、翌日の活動方針を決定した。そ

れと並行して、警察が麓のご家族待機所にかがって、撮影してきた映像をご覧いただきながら捜索結果を報告し、「このあたりをもっと徹底的に探してほしい」といった要望が出れば、その思いを翌日の捜索に反映した。

また、捜索中には希望された行方不明者のご家族に消防防災ヘリや自衛隊ヘリに乗っていただき、上空からご覧いただいた。

9日間の再捜索を振り返って、当時の危機管理監はこう述懐する。

「前年度に王滝村役場内に設けた指揮本部での経験を活かし、再捜索では3隊と県が集まって現地に本部を設け、パーテーション（間仕切り）もなくなりました。それが非常によかったです。仕切りがないので、情報を迅速に共有できましたから。無線でやりとりする内容も聞ける状態でしたし、こちらが尋ねればすぐに最新の情報も教えてくれました。もしそれぞれの隊が別室になっていたら、ここまでひとつひとつの活動はできなかったと思います」



ヘリコプターが着陸できないときは徒歩で下山した（松消）

# 搜索終了

## ●災害対策本部の決断

再搜索を開始して3日目の7月31日、一ノ池付近で行方不明者1名を発見したが、その後は発見できない日々が続いた。

「この後も発見が続いてほしいと祈るような気持ちでいましたが、そうはいかず、日を迫うごとに『今日はここを搜索しましたが、発見には至りませんでした』とお伝えすることが、ご家族のお気持ちを察すると非常につらくなりました」(当時の危機管理監)

再搜索の終了時期は、あらかじめ決められていたわけではない。最終的に終了を決定したのは8月6日であった。

この日の16時30分から、県庁の災害対策本部と現地指揮本部、木曾合同庁舎の3ヶ所をテレビ会議システムでつないだ災害対策本部員会議が開かれた。その席上で現地の搜索隊から「重点搜索エリアについては、搜索不可能な場所を除いて搜索が完了したこと」「行方不明者のご家族の要望を踏まえた重点搜索エリア外の搜索を、あらゆる手段を用いて実施したこと」「隊員の安全確保等に鑑み、火山活動が継続している3000メートル級の高地において搜索活動を継続するのは困難であること」の3点が報告された。そしてなにより、全関係者に共通していたのは「やることはすべてやり尽くした」という気持ちだった。

「私自身は搜索現場へ行ったわけではありませんが、毎日汗まみれ、泥まみれになって現場から戻ってくる隊員の表情を見ると、全力でやるべきことをやっているという確信が持てました」(当時の危機管理監)

会議の終盤、阿部知事から「搜索をやりきったか」「もしこれで搜索を終了するとしても悔いはないか」との問いがあった。これに対し、その場にいた関係者から「やれることは全力でやり尽くした。搜索活動に悔いはない」との発言があり、災害対策本部は最終的に再搜索活動の終了を



搜索終了を決定した第31回災害対策本部員会議

決断した。

その決定について、行方不明者のご家族にお伝えした。ご家族からは、「全員見つかるまでやってほしい」「来年も搜索してほしい」などの訴えがあった。

また、終了を知った関係者の心中も複雑だったようだ。「隊員にケガなく無事に終えられたという気持ちと、1名しか見つけられなかったという気持ちと、その二つがありました」(当時の木曾広域消防本部副署長)

「やり尽くしたという自負はあります。しかし、5名の方が今もって発見されていないという事実があるので、それを声高には言えません」(当時の県警警備部長)

## ●記者会見で搜索終了を発表

行方不明者のご家族に再搜索活動の終了をお伝えした後に関いた記者会見で、阿部知事は次のように発言した。

「再搜索活動の開始当初に定めた搜索計画、重点搜索エリアの搜索が昨日の段階で終了し、本日はご家族の皆様方からのご要請を受けとめて、搜索隊が必要と判断したエリアの搜索を行いました。そして、搜索隊の今日の活動報告を



阿部知事が記者会見で搜索終了を発表



記者会見には多くの報道機関が集まった



再捜索終了の翌日、シェルターの撤収作業が行われた（木消）

踏まえ、県災害対策本部員会議を開催して、今後の対応について協議しました。

結論から申し上げますと、再捜索は終結する、ということが本部員会議での決定事項です。

ご家族の皆様方の気持ちを察すると、誠に無念でやるせない思いますが、これ以上の捜索活動は行わないということを決定させていただきました。

その理由は3点あります。

まず7月21日に県災害対策本部員会議を開催し、捜索計画を定めました。昨年の噴火災害以降、県警が中心となって行方不明者の皆様の情報を収集・分析してきましたが、それを総合して決定した重点エリアを徹底的に捜索すること。そして、遺留品などの発見と、それを手がかりとした周辺エリアの徹底捜索。再捜索のミッションは、大きくいうとこの二つでした。そのミッションを、雪溪など捜索不可能な箇所を除いてやり切ったというのが1点目。

2点目は、ご家族のご要望に応えた捜索を行うという、8月3日の災害対策本部員会議で決定した方針についても捜索を終えたということ。

それから3点目。御嶽山の再捜索は、捜索隊員の安全確保最優先を当初から決めていました。非常に危険な地域での捜索活動であり、新たな手がかりがないなかで、火山活動が継続している標高3000メートル級の高地においてこれ以上捜索活動を継続することはできないということ。

以上3点であります。

なお、今後県警、県消防防災ヘリで捜索不可能であった雪溪は不定期ではありますが目視確認を行い、行方不明者の発見につながる発見があった場合は対応を検討します。

この再捜索は、ご家族の思いを最優先に尊重して取り組

んできました。捜索隊も思いを共有して非常に危険なところへ捜索に行っていただけたと思っています。今後とも警察と十分連携して、できる限りのご家族への対応を行っていききたいと思います。

今回の決定は大変苦渋の決断ではありますが、この決定はこの会見前にご家族へ伝えてあります。決定の背景は、危機管理監からご家族に対してこの後丁寧にご説明する予定としております」

#### ●再捜索終了後の対応

こうして再捜索が終了し、11月6日に災害対策本部を警戒対策本部に切り替えたが、行方不明者がまだ5名いる以上、すべてが終わったわけではない。最後に開かれた災害対策本部員会議でも「県と警察が連携して、今後でもできる限りご家族に寄り添った対応をしていく」ことが確認され、県警ヘリ、消防防災ヘリが出動する折には不定期ながら目視での確認を行っている。



シェルター撤収の終了後、山に向かって黙禱を捧げる消防隊員（木消）